47

古代日本の出産における白色

内野　　花
関西大学大学院文学研究科

古代において，出産は，現代以上に，女性にとって自身の生死をかけた一大事業であった．また，現代と比べて医学が未発達であり，かつ，内科的手技による治療が中心であったため，妊産褥期における死傷率が非常に高かった．そのため，医学先進国であった中国から輸入した医学知識・理論を基盤にしつつも，医学的根拠の全くない呪術や民間習俗が数多く生み出されたのである．これらの呪術や産科習俗はひとびとに支持され，現代においても，民間で伝承されつづけている．また，妊娠から産褥期まで，妊産婦をはじめとする周囲のひとびとすべての行動様式は，儀式化されていた．儀式化することで，関係者全員の，妊産婦の負担となるような言動を制限しただけでなく，ひとびとの心理的負担の軽減や心理的充足感・安心感の確保，救急時の処置の迅速化，診断基準の一元化を可能にしたのであり，それゆえに，この儀式化は体系化の一途をたどっていくことになる．

このような出産を行っていた古代，洋の東西を問わず，産褥期には白色を基調の色彩としていた．出産をおこなう産室や調度品，ひとびとの服装など，関係するすべての色彩を白色のみで統一するという，非日常空間を演出していたのである．月経の赤不浄，死の黒不浄にならんで，出産を白不浄と呼んできた日本のケガレ観に代表されるように，出産は，古代よりケガレの一種として位置づけられてきた．これは，医学の未熟さゆえに，妊産褥期における妊産婦および胎児・新生児の死傷が非常に多かったためであり，それゆえに，出産は死と隣り合わせの，常に不浄を生み出す要素，赤不浄や黒不浄を併発する危険性をはらんだ行為とされていた．つまり，「白」とは，生死の境界を含んだ異空間や異時間をはじめ，非日常の事物全般を指していた色彩と考えられる．白色のみで区画された空間を創造することで，出産におけるケガレや不浄さが日常世界に蔓延しないように，結界の意味合いも恃んでいたのであろう．

さらに，色彩心理としての白色は，副交感神経様作用，いわゆるリラックス効果を持つ色彩でもある．妊娠や出産は，心理的にも肉体的にも変化が大きく，特に内分泌量の変化が激増する産褥期は，産婦にとってはさまざまな心身症を引き起こしやすい時期である．胎盤消失による急激な内分泌消退や妊娠・出産による体形変化，育児・将来に対する不安，プレッシャーなどに起因するマタニティブルーなどがその代表にあげられる．このような肉体的・精神的に不安定な状態にある産婦がその体調が回復するまでのあいだ過ごす空間を，白色という副交感神経様作用のある色彩で統一し，かつ，産室という出産のためだけにつくられた特殊な空間に入って日常空間とのつながりを一時的に遮断することで，産婦およびその関係者すべての心理的緩和をうながしたのである．

また，白色という，他との対比が容易な色彩を採用することで，医療面・衛生面での変化も察知しやすくなる．つまり，外部から産室への汚染物の流入をはじめ，悪露や顔色の変化，など，産婦や新生児の体調管理を容易にするためにも，白色は出産時に使用する色彩として認知され，採択されつづけたと考えられる．